新刊紹介

INDIANISME ET BOUDDHISME
Mélanges offerts à Mgr Étienne Lamotte

ベルギーのルーヴァン・カトリック大学は、十五世紀以来ルーヴァンの地にその伝統を守ってきたが、その中のフランス語系部門は、近年、ルーヴァンの南約二〇キロの地点に移転を開始し一九八〇年に完了した。全く新しい学術都市 Louvain-La-Neuve を建設して、新しい風光の中に再誕生したわけである。

この中には東洋学研究所のフランス語系部門も含まれているが、この研究所はもとエラスムスの創設にかかり、ラテン・ギリシャ・ヘブライ語の研究機関として発足したという伝統をもつ。近年に至っては一九七四年に停年退職するまで、仏教学者エティエンヌ・ラモート師がおられた所である。今回、この研究所の移転を機に、同研究所がラモート師に捧げる記念論集を編纂したのが、ここに紹介する〝INDIANISME ET BOUDDHISME（インド学と仏教学）〟である。

ラモート師が秀れた仏教学者であることは今更言うをまたないが、同研究所がラモート師にこの書を捧げる意図もまた、師の学績の偉大さに対する敬意である。更にこの書に対する論文執筆協力者は各国の学界にわたり、師を讃えて論文を献呈している。これらの執筆者は、A. Bareau, H. Bechert, C. Caillat, E. Conze, D. Donnet, H. Durt, J. Filliozat, K. Fujita, Ch. Guth Kanda, M. Hara, A. Hirakawa, M. Hofinger, I. B. Horner, J. Kato, J. May, K. Mimaki, G.N. Nagao, H. Nakamura, W. Rahula, J. Ries, J. Ryckmans, H. Sakurabe, R. Shih, R.A. Stein, J. Takasaki, C. B. Tripāthi, E. Waldschemidt の二十七氏であるが、この中、日本の学者は、藤田宏達・原実・平川彰・加藤純章・御牧克己・長尾雅人・中村元・桜部建・高崎直道の諸氏である。その数は執筆陣の三分の一の多きにのぼっている。これはラモート師と日本の諸学者との親密さと、日本のインド学・仏教学界が一般に受けている評価の高さを示しているものといえるであろう。

この二十七名の学者がそれぞれの立場から発表された論文は、何れもこの書に華をそえ、ラモート師に捧げるにふさわしい記念論集であるが、全体の傾向としては、インド学及び仏教学の言語研究からの所論が目立っている。これらはラモート師の学問の傾向と軌を一にするものである。

また、ラモート師はカトリック司教という立場にあられて仏教学研究に生涯を捧げられた方であるが、本書のはじめにラモート師について、ルーヴァン・カトリック大学（ルーヴァン・ラ・ヌーブ）のD・ドネ教授が〝ラモート師の業績〟と題して書かれているのは、注目すべき報告である。それはラモート師の業績と仏教学研究に献身されたその精神的基盤を知る上で貴重である。以下それにそいつつ簡単に紹介してみたい。一九〇三年、ディナン（ベルギー南部の町）に生れたエティエンヌ・ラモートは、一九三二年にルーヴァン・カトリック大学に於て学究生活に入っている。以来一九五九年まで、大学では西洋古典言語及びギリシャ文学を、東洋学研究所ではサンスクリット・インド学序説・インド哲学史と〝仏教の言語〟（サンスクリット・チベット語・漢文）と名付けた講義を行なっていた。この〝仏教の言語〟は、ラモー

ト師をしてその名を高からしめた文献学的研究方法であった。

しかし一九五九年には西洋の古典文献学をやめ、東洋の文献研究に没頭し始めている。以後、一九七四年の退職まで続くが、その間にパーリ語の講義も加えている。大学及び研究所のこの講義の間に出版され報告された著作や論文の数はおびただしいが、一九二九年出版の『バガバットギーターについての覚書』に続いて、師のラ・ヴァレ・プサンに鼓舞されて出版を重ねてゆくこととなる。一九三五年の『解深密経、チベット語テキスト校訂・訳』は、ラ・ヴァレ・プサンをして第一級の研究方法と激賞せしめたものである。一九三六年には『成業論訳註』、一九三八―一九三九年には『摂大乗論訳註』二巻、一九六二年には『維摩経訳註』、一九六五年には『首楞厳三昧経訳註』、一九四四・一九四九・一九七〇・一九七六・一九八〇年には『大智度論訳註』五巻がそれぞれ世に送り出された。また、この間には一九五八年に『インド仏教史』が出版されている。

これらの書については、多くの学者から讃辞がよせられているが、ドネ教授がこの報告の中に引用したものの中からその一、二の例をあげてみよう。J・メイ教授は『首楞厳三昧経訳註』について、「この訳註は首楞厳経という錯雑したテキストの迷路に迷う足どりへの確かな指針である」といい、また、「ルーヴァンの師はその取り扱うすべての題材を、徹底して明快に示し得る絶大の才能を持ちあわせている」とも讃えている。更にラモート師のパリ留学時代からの知友P・ドミエヴィル教授は、『大智度論訳註』について、「この書は西洋流にいうなら、ラモート師の上には恩寵が見出されるというべく、かつ正確・適切・明晰な註を付したフランス訳は、今まで如何なる言語によってもなされなかった所である」といっている。そしてこの書を、五十年前にラ・ヴァレ・プサンによって訳出された不朽の名訳『阿毘達磨倶舎論訳』に比肩すべきものであると明言している。

続いてこの報告は、ラモート師の五四の論文と約三〇の報告の一覧表を掲げている。続いてラモート師について、師は心底深くに根を下ろした誠実なキリスト教徒であり、キリスト教徒の模範であるが、このキリスト教徒は、いかなる意味に於ても護教的な目標を立てることなく仏教学研究に生涯を捧げたが、それは最も開かれた精神によって導かれたものであったと述べている。独断を排し、自らに真理ありと自負し他を誘いこもうとする高慢な自信を拒否するものであったとも記している。以上、紙数の都合で簡略に紹介したが、終に、眼を病まれるというラモート師の御快癒を心より念じあげ、かつ、ラモート師のあとには仏教学講座が絶えていると聞くルーヴァン・ラ・ヌーブに、その再開の日を期待している。(1980, Louvain-La-Neuve, pp. XVI+376)

(白土わか)